総評　２０２３年６月分　杉本真維子

「病室はひかりが溢れている／いのちのひかりか天のひかりか」加藤万結子（愛知県）
目に見えない光の存在を感じさせます。たしかに病室には無機質な蛍光灯の光を超えたものがありますね。

「夕立を私のなかに隠しもつ／いつか名を呼ぶ我が子のために」こはくいろ（大阪府）
「もつ」でなく、「隠しもつ」。この正確な語彙が、「夕立」とともに体内に別のいのちをもつことの烈しさを突いています。

「夕立を見る心臓のやわらかさ」吉沢美香（宮城県）
自覚しようもない心臓のやわらかさが「夕立」をきっかけに感受されるものとなることの不思議。雨に打ち付けられているものは心臓のように大切なものなのかもしれません。

「蛇口には星の通った跡紫陽花」吉沢美香（宮城県）
紫陽花との関係は読めませんでしたが、「蛇口には星の通った跡」という表現の美しさは格別です。

「カーテンに影を吸われて／共犯になるならなれよ春の葉桜」からすまぁ（神奈川県）
「カーテンに影を吸われて」露わになった主体が、花を落として露わになった葉桜と鮮やかに出会っています。「なるならなれよ」の絡まるような音の先に「葉桜」があるところも、ようやく辿り着いたという感じがしていいです。

「未開封りんご酢奥で光る梅雨」字坊人造（宮城県）
梅雨に収納庫の奥で光るものは「りんご酢」でなければならないのです。その言葉の選択に必然性が感じられます。つまり、ここには詩が隠れています。

「朝一番に教室へ／／部屋いっぱいに大きな薬指」羊夏生（東京都）
これは驚きの表出なのでしょうか。新しい感性に期待します。

「蝿飛んで当たる鏡の裏の奥」田崎森太（東京都）
「鏡の裏の奥」とは表なのでしょうか。言葉で指したとたんにその場所が霧消してしまうかのようです。

「君に会いたくて　唱えた。／まじない　墓石　まじない／墓石。」五代康成（埼玉県）
「まじない」と「墓石」。ありそうでなかった組み合わせです。畳み掛けるようなリフレーンが「会いた」い気持ちに強度を与えています。

「アルパカの純愛を妨げている」松下誠一（東京都）
相変らず抜群の破壊力で、因果関係も時間も何もかもを無化させてしまいます。今回も楽しく読みました。

「下書きのような声で母を呼ぶ／／あの日のあこがれが発芽する」まちりこ（埼玉県）
声についての「下書き」という直喩が大きな成果でしょう。

「ぬばたまの硯に残る墨汁と／この世に生まれなかった言葉」和泉次郎（新潟県）
言葉が生成する場に立ち会おうとする、優れたまなざしがあります。

「カランコロンカラン／　　寝冷えの独り言」山本先生（東京都）
「カランコロンカラン」が寝冷えのオノマトペとは！ 素晴らしい発明ですね。

それでは、次回も楽しみにお待ちしています。